



昭和50年(1975年)

8月号(No. 362)

社団法人 日本山岳会
(J. A. C.)

定価一部 100円

目次

本文・紀行など

- 旧上高地山荘のこと
(日高信六郎)……………(1)
- 上高地山岳研究所使用規定……………(2)
- 日英交歓登山の思い出
(松田 雄一)……………(3)
- ウォルター・ウェストンを
しのぶ
—ウェストンのお祭り—
(浜野 正男)……………(4)
- ウェストンの墓をたずねて—
(上条 輝夫)……………(5)

行事・委員会など

- 7000メートル峰登山を検討する
—第10回高所登山委員会—……………(4)
- UIAA のマークについて
(関口 周也)……………(6)

図書紹介

- 『霧の谷』増永迪男……………(7)
- 『南山の道』小滝清次郎……………(8)

その他

- 山岳会会員の集い
三水会について……………(8)
- 第18回有志閑談会……………(8)
- ヒラリー基金への応募を……………(8)
- 神谷記念図書目録(Ⅱ)……………(6)
- 名誉会員三枝守博氏……………(9)
- 元役員中司文夫氏……………(9)

旧上高地山荘のこと

日 高 信 六 郎

新しい山岳研究所が開設の運びに至った機会に、その前身たる上高地山荘(山岳総合研究所)の由来を書き残すことを思いついた。

上高地にあった案内人組合の小屋はもと警察の派出所だったそうだが、その後実際上は松本駅前の飯田屋旅館主人のモノになって、同人が時々使っていたらしい。ところがバスの終点に案内人組合の建物が出来たため、この小屋は存在の理由がなくなった。いろいろな方面から入手の希望が出たが、国立公園地域内である上に前記の事情もあって、許可がおりそうもない。この話を高山信濃支部長に伝えたのは西穂山荘の村上守君で、昭和三十六年二月ころのことであった。

山岳会では高山氏の申出に基き理事会で協議の末これを譲り受けることに決した。

当時会長だった私は、三月下旬

西穂の積雪期登山技術指導者講習会の帰途、高山支部長と松本営林署に大内署長(松高出身)を訪ね、当方の意向を述べて懇請した。その話によると、この小屋は特別のはからいで黙認しているのだから本来の目的以外には使えない、自然取りこわす他はないのだから、全国的な社団法人日本山岳会が登山技術研究所として利用されるのは当方としても好都合だと、極めて好意的に許可の意を示されたので、計画実現の目途がついた。当方の方針は次の通りだった。

(一)使用の目的は山岳と登山に關す

る研究講習および外国同好者の利用。(二)譲渡契約相手方は日本アルプス案内組合安曇支部長上条安曇村長(飯田屋主人は名を出さず、建物は同人から山岳会に寄贈し、当方からは謝礼を出す)。(三)交渉成立の上は保存登記をする。(四)運営委員会を設け本部と信濃支部とが協力して運営に當る。

右の次第は四月六日の理事会に報告され、引続いて現地では高山支部長、本部では折井(総務)松本市出身、太田(経理)両常務理事が主として各方面との交渉に當った。関係官庁の厚生省国立公園部(大井課長、国立公園土地管理事務所(三枝レンジャー)、松本営林署長、島々担当区主任(湯川事務官)、上条安曇村長などいづれも好意的で交渉は円滑に進んだ。また建築については松本熊次郎会員が資材の調達や施工に絶大な援助を与えられ、近藤茂吉名誉会員から資金についてご配慮を

得、会員諸氏から備品の寄贈があったことはありがたく、特に藤島会員からの鉄板製大型で頑丈なストープは大いに役立った。

かくて六月二十一日改修落成の報を受けて喜んだのも束の間、七月四日出水のため、小屋流失との電話で驚かされた。そこで八月六日太田理事と同行、松本から高山支部長と飯田屋さんを加えて現地を検分した。小屋は西穂から派生する善六沢下流の小扇状地にあるのだが、豪雨で沢が抜けてテッポウ水となり樹木をなぎ倒し、大小の岩石を押し流してマトモに小屋の背面を襲ったからひとたまりもなく押し流されるところだった。が、大木が横たわって巨岩を食い止めたおかげで、小屋は床上うず高く砂礫に埋まり、その重みで流失を免がれた。入れたばかりの畳建具はメチャメチャになり、台所や便所が相当いたみはしたが修理に堪えるところわかって一安堵した。

このときの豪雨はすさまじく、対岸の五千尺ホテル背後の沢も出水があったが、運よく途中で止った。営林署が手がけた後始末と土止め堰堤築造の着工がおくれて気をもまれた。こんどの出水とこれら復旧工事のためトラックやブルドーザーが入りこんだ結果、樹木に囲まれて閑静だった山荘のまわりの木立ちが逃げ、路からよく見えるようになり、また沢の川床が高くなったため水の手が不便になったので井戸を掘った。

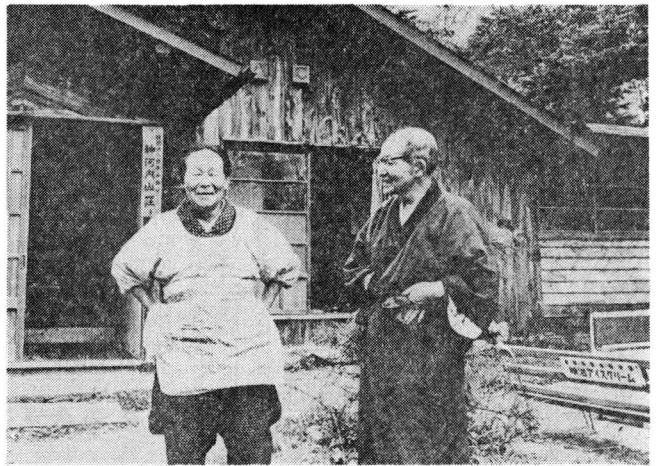
小屋の修理が整った十月二十九日の日曜に安曇村長、営林署代表、レンジャー、上高地の旅館主人たち、村上君や飯田屋主人などを招いて酒と折詰を供し風呂敷を配ってささやかな落成式を開いた。東京から山崎、川上、日下田、高橋進各理事および片桐、竹田、山野井の諸氏と地元の高山支部長、百瀬会員が参加し賑やかであった。

以上の次第は十一月二日理事会で山崎理事から報告があり、さらに会報第二十八号誌上で従来の経過を報告し、山岳会の総合研究所として登山技術の講習や各種の研究調査の拠点または小集会の会場として会員の利用に供する旨を披露し、正面の見取図と平面図を添えた。

その規模は木造平屋建二一坪、室数四(八畳、六畳各一、四畳半二)、風呂場、炊事場、物置。収容人員二〇、資金計画は総額二八〇



流出した土砂に道路を埋められた旧山荘



旧山荘前の平林夫妻

鎖されて次の時代を迎えるに至った。平林老人は閉鎖の翌年持病の高血圧のため死去された。なお小屋の照明は電灯は最初から無く、最後までランプであった。

以上ながながと昔話を披露したのは、新しい山岳研究所の運営について多少なりとも参考になるかと思っただけである。新山荘は林

山岳研究委員会が会報第三二五号に発表された通り、登山の拠点、研究集会、会員の休養滞在、外客の接待等にあてられるのだが、その管理運営については本部（担当理事）、地元（信濃支部）、現場（管

事）の三者間の常時緊密な連絡と協調が根本であって、最も重要なのは管理人の選任であり、直接その監督に当るのは地元支部だから、現場の実情に応じて臨機の手が打てるよう地元の行動に相当のゆとりを認めることがよからう。

結局のところ、設備の運用如何はこれを利用する会員各人の理解と良識にかかると私は信じている。

本稿を草するにあたって、折井、太田両氏の援助を得、高山氏には全般にわたって校閲補正を煩わした。

上高地山岳研究所使用規定

山研運営委員会

上高地山岳研究所使用規定

第一条

社団法人日本山岳会は山岳知識の研究と登山の向上を図るため上高地に山岳研究所（以下山研という）を設置しその使用についてはこの規定によるものとする。

第二条

山研を使用出来るものは本会会員（団体会員にあってはその代表者）を優先し、非会員にあっては会員の同伴者であることを原則とする。但し本会が開催するウェストン祭、研究会、講習

万円（建設費一七〇万、付帯工事費五〇万、造作備品等四〇万、予備費二〇万）、右所要経費は同時に発表されたクラブルーム移転費二二〇万円と合計五〇〇万円について会員の寄付を要請した。（所要経費決算の内訳は残念ながら判明しない）

次いで翌三十七年四月の総会席上近日中に山荘使用の見通しがついていた旨を披露し、会報二二二号で六月付けの上高地山荘使用規程を発表した。使用料（朝夕二食付）、会員一泊四〇〇円、非会員六〇〇円。自炊は遠慮、副食物持参、収

容人員二〇（備付寝具一〇名分）。

山荘開設に当って問題となったのは登山研修会等の拠点となった

素なものにするか、会員の家族づれや外国の登山家などの宿泊に適するクラブハウスのものにするかの点であった。当時の上高地の実情や資金などと関連していろいろ意見が出たが、結局現存の家屋に手を加える程度の簡素なものに落ちついた。管理人はなかなか適任者が見付からず、相当出入りがあつた末、案内組合を隠退した平林次男老夫妻が引受けることになつた。これらについては高山支部

長と村上守君のお骨折りを煩わした。松本在住の小里頼忠会員もよく気を配ってくれた。

山荘は当初よく会員に利用されその間には川上理事引率の防衛大

学山岳部や台湾と韓国の山岳会員の合宿などに役立ったが、会員の利用率は減る一方で、宿にあぶれた登山客が宿屋やレンジャーの紹介で泊るほうが多くなった。人のいい平林夫妻はよく彼等の世話をしたが、山荘本来の趣旨からいうと物足りぬことで、古い家屋が朽損する事情もあり、昭和四十四年登山期終了とともに十月一杯で閉

会等の諸行事の場合はその使用を断ることがある。

第三条

山研使用希望者は原則として使用予定の一カ月前から申込みを受付ける。但し当日宿泊可能な場合は、山研直接申込みでもよい。次の事項を往復葉書で本会に連絡し、許可を受けなければならぬ。また使用日一週間以内に宿泊予定を取り消した場合一人一律五〇〇円(切手代用可)を支払うものとする。

1、使用者氏名 会員番号

2、使用目的

3、使用予定期日

第四条

山研使用者は到着と同時に当該年度の会員証を提示し、備付名簿にその氏名、会員番号を、また非会員は、紹介者を記入しなければならぬ。万一不都合なことがあった場合、紹介者はその責任を負うものとする。

第五条

山研使用者は管理運営費として次に定める料金を支払うものとする。

会員 一二〇〇円

(団体会員にあつてはその代表者一名とす)

非会員 二〇〇〇円

就学前子供五〇〇円、小学生八〇〇円

但し本会職員は会員と同様の料金とする。

第六条

山研使用者は運営をよりよくするため別に定める事項を厳守しなければならない。

第七条

この規定の改廃ならびに細則の制定は、山研運営委員会にはかり、理事会の議決によっておこ

日英交歓登山の想い出

松 田 雄 一

話は少し旧聞に属するかも知れないが、この度のエリザベス女王の来日を機に、一九七一年秋、天皇、皇后両陛下の訪英を前にして親善訪問に来日した英国海軍フリゲート艦アレスラーのトーマス艦長 (Commander M.B. Thomas) 一行との親善登山の想い出をつづてみることにしたい。

* * *

一九七一年九月下旬のある日、香港から「PERSONAL」と注記のある一通の航空便が、本会気付で私のもとに届いた。

この九月十七日付の香港からの手紙は Royal Navy のフリゲート艦 H.M.S. ARETHUSA のトーマス艦長からのもので、同氏の来信は次のようなものであった。「私はアルパイン・クラブのメンバーで、この度日本を親善訪問しますが、マイク・パンクス少佐

なうものとする。

付則

1、山研開設期間は毎年上高地バス開通時期より閉鎖時期までとする。
2、この規定は昭和五十年七月十日より実施する。

入港したら尾上氏宛電話でコンタクトをされたいとの返信を出して同艦の入港を待つことにした。

* * *

九月二十七日の朝刊をみて、あっと驚いた。「英軍艦、串本沖でハイジャック信号」と出ているではないか。すなわち「二十六日午後七時二十七分ごろ、航空自衛隊串本(和歌山県)レーダー基地で同基地の南東沖合を二〇ノットで航行中の船が、電波による敵味方識別装置(SIF)のハイジャック信号に似た電波を出しているのを受信した。信号は同夜十一時半現在、引続き発信されている。

航空自衛隊と、米第五空軍で調査したところ、敵味方識別装置を積んでいる船は軍艦だけで、付近を通っていたのは、英海軍のフリゲート艦アレスラー(二四五〇トン)であることから、同艦で何か異常があったのではないかとみられている。同艦は二十七日午前九時に名古屋入港の予定。

だが、海上自衛隊などには二十七日午前零時現在、何の情報も入っておらず「もし、台風の影響で緊急事態が起きたとしても普通の危難信号(SOS)を出すはずだし、軍艦の敵味方識別装置は、ハイジャック信号を出す仕組みにはなっていない。せいぜい装置の故障ではなからうか」と防衛庁海上幕僚監部はいつている。

英国大使館は「同艦はいろんな

波長で緊急信号を送れるのに何も信号を出していない。航海用レーダーの周波数がハイジャック信号の周波数ときわめて近いので、これが受信されたと思われる」といつている」

* * *

この新聞をみたときは、たとえ誤報であっても、後始末のために登山どころではないのではないかと考えたが、その後、尾上氏からの連絡によると、二十八日に電話で連絡がとれ、二十九日の午後熊沢先生も交えて、トーマス氏と会って登山のプランニングをねり、紅葉のすばらしい御岳に十月二日三日の週末登山を行なったとのことである。

英海軍側はトーマス艦長を含めて五名、東海支部からは、中世古夫妻、沖、鶴田の四名、好天にも恵まれ、楽しい日本の週末をすごし、全員大いに喜んで帰艦した由。艦は十月四日午前十時、予定通り名古屋港を出港したとのことであった。

* * *

その後十一月下旬、英国より十月八日付海上で書いたトーマス氏の札状が届いた。

Dear Mr. Matsuda,

Thank you very much your letter of 27th. September and for introducing me to the Tokai Section of your club.
Four of your members, Mr.

ウォルター・ウェストンをしのぶ

ウェストンのお祭り

浜野 正男

今年のウェストン祭は二十九回目だそうである。会報を調べてみたら昭和二十二年六月十四日が第一回と出ていた。実はその時、上高地の梓川のほとりの岩壁にレリーフをはめ込みに行つて第一回のお祭りを演出したのが私なのである。昭和十二年にできたこのレリーフを戦争中に軍と翼賛会等から、外国人のレリーフなんかで神聖な山をけがしてはならぬ、取りはずせ、さもなければ、ぶちこわすぞとおどかされた。やむを得ず山岳会で取りはずした。交野さんらが人目をしのいで、徳本を越えてひそかに虎ノ門のルームに持ち帰った。レリーフは空襲で焼けてしまい、それを佐藤久一朗氏が復元し、戦後に元の場所にもどすことになった。

山岳会はそのころお金もなければ人もいない。幸い私のいる

会社で上高地帝国ホテルの改修工事をしていたので、頼み込んでみたら、東京の工事長が心よくOKしてくれた。

東京の事務所まで持込んでくれれば上高地まで運搬しはめ込むまでやってくれるという。もちろんロハである。本当に助かった。横さんも行ってくれたはずである。梅雨の季節だからその日も雨もよいの日だった。松方さんがレリーフの下に付ける「ウェストン像」というのを、木製の札に墨で書いてくれた。あのかた独特の文字であつた。

現在のブロンズの英文ではなく、日本文字である。あれから約三〇年がすぎ去つたが、第一回に行つたきり今年までご無沙汰していた。今では梓川が本流となつて目の前を流れているが、前はもつと奥まった場所であつた。何だか前の場所と異つた処にあるように思えた。けれども今年も約五〇〇人もの参加者があり盛会であつた。織内副会長をはじめ大先輩の石原憲治さんや辻莊一先生らが加わり、エーデル・ワイスの女の子

の合唱隊の美しいコーラスで幕があいた。今ではこのお祭りが上高地の山開きのようなものにもなっている。来年は三〇年だから何か変つた企画をしたらという声もあった。上高地も昔と違つて便利になつて、松本からバスで二時間の所となつてしまつた。小さな宿屋であつたのが今では全部ホテルである。立派である。六月だから混みすぎて人間が歩けないなんてことはなかったが、真夏の行楽季節になると、どんな風になるのが心配である。上高地に入る人が、他人には迷惑をかけないということに心掛けてくれば、奇麗な山あいには残る筈である。新緑の上高地は矢張り日本一の景観だ。特に今年は残雪が多く、春山のように輝やいていた。奥穂、ジャンダルム、西穂と、雪をベトリと付けて、白樺やぶなや小梨の若葉の向うに光つていた。登山者だけが独占するわけにもいかないが、末長く神秘的な山のたたずまいだけは残しておきたい。

今年はウェストンさんの研究を英国でなさつた川崎の聖パウロ教会の垣内茂という牧師さんが講演をしてくれた。若い時の宣教師としてのウェストンの写真を手に入れて、それを引き伸ばしパネルにして山岳会に寄贈

& Mrs. Nakaseko, Mr. Tsuruta and Mr. Oki, took five of us to Mt. Ontake for the weekend. We ascended from Tanohara and then came down the Kaida kogen route. The weather was perfect and it was a memorable day.

I will not forget the kindness that we received and I hope that I may have the chance to repay it to any of your members who are visiting England. I was most impressed with my first sight of Japanese mountain scenery. Your sincerely, M.B. Thomas.

以上四年前の日英交歓登山一の

七〇〇〇メートル峰登山を検討する

△第一〇回高所登山委員会△

二年間いろいろな形で試みてきた高所登山委員会の区切りをつける集会として、三月十五日、七〇〇メートル峰の登山をテーマにした会を持った。ジャスーに登頂した市川章弘氏に講演と同氏撮影の八ミリ映画をやつてもらつて、話の糸口を作つた。

高所登山の議論は、とかく八〇〇メートル峰登山を対象としがちであつた。そして八〇〇メートルと八五〇メートルと八八〇

駒を紹介しましたが、今後この種の登山はぜひつづけていきたいと思う。

最後に、その折種々とお世話いただきました東海支部の皆さまにお礼申し上げ、筆をおくことにします。(一九七五年五月)



カット／山里寿男

〇メートルとでは、酸素の吸い方や補給法や組織の規模にそれなりの差がある、といった議論が重ねられてきた訳で、そんな角度からの研究はいろいろな立場で一応検討がすんだと思う。

よくイギリスのエベレストとオーストリアのブロードピークが比較され、エベレストは軍事的大部隊でブロードピークはゲリラ的小部隊の速攻などといわれる。この議論が軽薄に行き過ぎて、エベ

してくれた。恐らく額に入られ、上高地の山岳研究所に飾られることであろう。その折ある人から、来年はこの祭りに三〇回の永い間、支援してくれた人に対して感謝状を出してくれないかなという話をうけたまわった。その善意に対しては報いることも良いことなので、検討しますと答えておいたが、三〇回が一つの区切りだから考えてもいいと思う。

(一九七五・六・一三)

ウェストンの墓を
たずねて

上 条 輝 夫

一九七五年六月十三日、私たちが安曇村の二十五人は、姉妹村であるスイスのグリンデルヴァルト村を訪ねるため羽田をたつて、スイスとフランスをたずねた後、二十日早朝ロンドンに向った。ロンドンで北アルプス山小屋友好会長の村上守氏、安曇村商工会長の輪湖治氏と私の三人は一行と別れ、朝日新聞ロンドン支局の浅井さんの案内でウェストン氏の墓のあるパトニーバール墓地を訪れた。

出発に先だって、英国へ行くのなら、曾祖父嘉門次とゆかりのウェストン氏の墓参りをしたり、関係者にも会いたいもの

思い、日本山岳会の吉沢一郎氏やその他の方がたに橋渡しをお願いしておいた。

私たちは墓に近づいた。曾祖父とともに槍、穂高の連山を歩き、日本アルプスを世界に紹介し、日本の近代登山のきっかけをつくったウェストン氏の墓である。まわりに美しい十字架の墓がたちならぶ中に、ひっそりと草におおわれたそれはあまりにもさびしげであった。草を分けて碑銘を見ると、

「REV. WALTER WESTON
BORN MAR. DEC. 25 1860-
DIED MAR. 27 1940」

「FRANCES EMILY WESTON
BORN SEPT. 10 1872-DIED
MAY 17 1937」

とはっきり読みとれた。

ウェストン夫妻が、嘉門次と最後に穂高を歩いてから六〇年、胸の奥から熱いものがこみあげてきた。



ウェストンの墓前で

その後いったん浅井氏のお宅により、そこから車で一〇分ほどのところにあるウェストン氏が生前住んでいたアパートをたずねた。静かな住宅街の一角にあるレンガ造りの高いアパートで、その部屋は六階にあるというのだが今は他の人が住んでいて、昔をしのぶものもないというので、外から眺めただけであつた。山を愛した人の住居らしく質素なものであつた。

私たちは墓地管理事務所長のスクラットン氏に会い「ウェストン夫妻の墓に、日本の山男たちの謝恩の碑を置かせてもらいたい」と申し入れたところ「謝恩と友好のしるしなら実現に協力しよう」との返事をうけた。日本山岳会および、関係者との話し合いの上で、ぜひ実現させたいと切望するものです。

ストは権威主義のけしからん隊で、ブロードピークは庶民的な好ましい隊などどぶつ人間がいて、それが結構経験不足の初心者に受け入れられている。ヒマラヤの登山を簡単に類型化することには危険があつて、右にあげた論法にも承服しかねる点がある。エベレストをブロードピークの方法——四人の隊がシェルパも酸素も使用せずに登る——で登った人間がいな

い現在、エベレストにはブロードピークのブロードピークにはブロードピークのそうせざるを得なかった特徴があり、それぞれに模範的な成果をあげたのだと考えるのが正しい。

八〇〇〇メートル峰を登山戦術の面からとらえるときには、最終キャンプを八〇〇〇メートル前後に置く必要のあつた山と定義しなければならぬ。それらは完全な無酸素では登れなかった山でもある。そしてブロードピークのような山は、こうした観点から見ればむしろ七〇〇〇メートル峰の上限に属すると考えた方がよい。チョー・オユーなども同じであろう。マナスルはどうか。その点の検討をして見たら面白い。

山を頂上の高さで分類して、世界の八〇〇〇メートル峰は一四座というのはお子様向きの表現であろう。七〇〇〇メートル台の山でもジャヌーのように八〇〇〇メートル峰のやり方が用いられた山も

あれば、八〇〇〇メートルを越えていてもブロードピークのような登り方ができた山もあったのである。これから試みられるナンダ・デヴィの縦走などはたしてどうであらうか。案外八〇〇〇メートル峰のやり方が必要な山かもしれない。

ヒマラヤの登り方は、だんだん変化してきており、必ずしも過去の方法をそのまま踏襲していればよいという訳ではない。しかし過去をたいては吟味していい新しがり屋の空論などは取るに足りない。新しうに見えて実は何もいっていない場合が多いのだ。

われわれが今回七〇〇〇メートル峰を問題にしたのは、八〇〇〇メートル峰の議論がすでに一段落したからであるが、七〇〇〇メートル峰の議論は八〇〇〇メートル峰につながるという視点もも合せてのことでもある。

ハントは七〇〇〇メートルという高さを「少なくとも、さらに高い地点へ到達する最後の大努力を傾けるには十分なだけとどまっていられる」場所と定義している。この考えはいまも変わるものではなく、われわれはハントの著書『エヴェレスト登頂』から七〇〇〇メートル峰登山へのすぐれた助言を見出すこともできるのだ。

七〇〇〇メートル峰とは、七〇〇〇メートル前後に泊らなければ登頂できない山ということにな

る。それは独自の領域でありながら、八〇〇メートル峰をたえず連想させる高さでもある。

このような考えから七〇〇メートル峰登山を取りあげたのである。内外の代表的な登山隊の行動表が検討され、経験者の発言が加わって、充実した面白い議論になった。二時間にしぼって議論を集中し、記録をとったので、別の機会に発表したい。本委員会も、二時間の議論がそのまま読むに耐える記録となり得るところまでできた。出席者は十六人だったが、こうした議論ではその辺が上限であろう。むしろ六、七人をもって最良とするというのが私の考えである。不参加だった松田雄一氏からは長い意見書がきて、それはまたとにより参考となった。こうした資料を含めて、いずれ本委員会の報告書を作っておく必要もある。

議論は二時間だったが、その後場所を変えて深夜まで楽しく語り合った。

(原 真)

出席者

原真(司会)、市川章弘(講
演、ハミリ映画)、川上隆、

高木稔、池沼慧、大宮求、渡辺齊、高橋善数、三村和男、石川博、池田常道、広島三朗、塚本圭一、伊藤行人、浅見正夫、永井勝美。

UIAAのマークについて

関 口 周 也



国際的な山岳団体の機関であるUIAAの機関誌五月号に、次のような記事が掲載され、いま、世界中の人達の目に触れている。

「一九七五年二月に加盟団体の日本山岳会から連絡があり、デ

ュ貿易株式会社という日本商社が日本特許庁へ、UIAAのマークを登録しようとしているという。UIAAとしては、ただちに抗議したが、マドリッド協定を批准していない日本は、日本特許庁の決定を変えようとしな。

かくなる上は、この事実を加盟各団体に知らせ、デュコ貿易株式会社、もし海外で、このUIAAのマークをつけて、商品を販売するようなことをすれば、ただちに断固たる処置をとるほか道はない。

したがって、もしそのような商品を見かけたならば、ただちにUIAA事務局に知らせたい」というもので、記事中のUIAAのマークというのは、三つのピークの山のデザインの下部にUIAAの四文字を左横書きに配置してあるもので、UIAAの印刷物とか、出版物に使用されていて周知のものである。(上段カット参照)

また、UIAAでは、その登山用具安全委員会により、登山用ロープの安全基準を数年前に作り、これにパスしたロープについて、このUIAAマークをつけたラベ

ルの使用を許可している。

すなわち、このUIAAマークのラベルがついている登山用ロープは、UIAAの安全基準の要件を満たしている信頼し得る製品であると一般に認識されているのである。ヨーロッパからわが国へ輸入されているロープには、ほとんどこのラベルがつけられている。

デュコ貿易株式会社は、スキーとか登山用具の輸入商社で、UIAAがどのような機関で、このマークがUIAAのシンボルマークとして、また、登山用ロープの検定証として使用されているものであることを当然、承知しているはずであるにもかかわらず、日本の商標法では、先登録が存在しなければ、国連とか政府の機関の標章のように、かなり著名度の高いものでないかぎり、登録され得ることと知って知らずに、いずれにせよ、独占的に使用せんがためにこの他人のマークについて、商標登録を企てたものであることは、否定し得ないだろう。

幸いにも、この商標登録出願は出願公告(登録するぞという特許庁の公告で、異議があれば、公告後二ヵ月以内に、何人もその申し立てをすることができ)の段階で、登山用具を扱っている商社からの異議申立によって登録は阻止されるものと思われるが、結論がでるのは、早くても二年、おそければ数年後というのがわが国の現状

である。

もし、前述の異議申立がなされずに、または、異議申立が理由なしと決定され、このマークが前記デュコ貿易株式会社の独占されるところになると、どのような影響があるだろうか、ということを考えてみる必要がある。

まず、デュコ貿易が、同社から使用を許諾された者以外は、このマークを日本国内で使用する事ができなくなる。いままでも輸入されたものについては、先使用权が存在するけれども、今後、UIAAの安全基準を満たすロープであっても、デュコ貿易の許しを得なくては、日本ではこのマークをつけることができないわけである。

つぎに、デュコ貿易またはこれの許諾を受けた者が、このマークをつけて登山用ロープを販売するようにになると、別の問題が生れてくる。さきに述べたように、UIAAの登山用ロープの安全基準とその検定について知っている人たちは少なくない。のみならず、この安全基準は、かなりきびしいものであることも知られている。日本製のロープで、この安全基準の各要件を満たしているものは、まだないという事実からも、これを推定することができるのである。

そこで、もしデュコ貿易またはこれに許諾を受けた人たちによって、このマークをつけた登山用ロープが販売されると仮定すると、

神谷記念図書目録(Ⅱ)

図 書 委 員 会

・加藤美命著

高原のささやき 朝香屋書店

一冊

・中村道太郎著

湖沼調査野帖 錦城出版社

一冊

- ・大和山岳会著 大和アルプス大台ヶ原山 大和山岳会 一冊
- ・桑田春風著 登山物語 自学奨励社 一冊
- ・山本徳三郎著 山の幸 小川誠文堂 一冊
- ・徳富猪一郎著 名山遊記 民友社 一冊
- ・土井道彦著 あこの山 磯部甲陽堂 一冊
- ・天野佐一郎著 多摩の史蹟 自彊館書店 一冊
- ・霧の旅 第一年第一号、第一九年第五号 四二冊
- ・霧の旅 第一年第一号二号再版、第三号再版 第二年第四、第六号ゲラ刷のみ
- ・霧の旅 第二年第五号、第三年第七号、第四年第九号、一〇号 一十一号欠
- ・霧の旅 第五年第一二号、一六号 欠
- ・高畑棟材著 山を行く 朋文堂 一冊
- ・行雲とともに 朋文堂 一冊
- ・田島勝太郎著 山行記 昭文堂 一冊
- ・奥多摩 山と溪谷社 一冊
- ・河田植著 静かなる山の旅 自彊館 一冊
- ・一日二日山の旅 自彊館 一冊
- ・山に憩ふ 山と溪谷社 一冊
- ・山とふるさと 山と溪谷社 一冊
- ・小さき峠 十字屋 一冊
- ・旅に住む日 日新書院 一冊
- ・かいしなの 山と溪谷社 一冊
- ・河田植、高畑棟材著 東京付近の山々 朋文堂 一冊
- ・奥秩父とその附近 朋文堂 一冊
- ・諸家編 東京附近山の旅 朋文堂 一冊
- ・武田久吉著 尾瀬と鬼怒沼 梓書房 一冊
- ・松井幹雄著 霧の旅 朋文堂 一冊
- ・大菩薩連嶺 光文堂 一冊
- ・原全教著 奥秩父 朋文堂 一冊
- ・奥秩父続編 朋文堂 一冊
- ・日本登高会編 上越の山 三省堂 一冊
- ・原口亨著 赤石白峯山脈縦横記 洛陽堂 一冊
- ・田部重治著 日本アルプスと秩父巡礼 北星堂 一冊
- ・峠と高原 大村書店 一冊
- ・山と溪谷 第一書房 一冊
- ・角田吉夫著 上越国境 大村書店 一冊
- ・平賀文男著 日本南アルプス 博文館 一冊
- ・渡辺公平、細井吉造、山下一夫共著 南アルプス八ヶ岳連峯 三省堂 一冊
- ・菅沼達太郎著 東京近郊の山と溪 大村書店 一冊
- ・山梨県山林会 南アルプスと奥秩父 改造社 一冊
- ・尾崎喜八著 山の絵本 朋文堂 一冊
- ・訳著 エミール・ジャヴエル 一登山家の思い出 朋文堂 一冊
- ・旅と滞在 朋文堂 一冊
- ・荒井道太郎訳著 モルゲンターレル 山ノ朋文堂 一冊
- ・同 普及版 一冊
- ・マイエル 山をめぐる行為と夢想 朋文堂 一冊
- ・中村清太郎著 偃松の告白 コマクサ義書 朋文堂 一冊
- ・加藤泰三 霧の山稜 朋文堂 一冊
- ・以上 計一五七冊

たとえ、そのロープがUIAAの安全基準の各要件を満たすものでなくても、前述のような認識からして大方の需要者は、あたかもUIAAのきびしい安全基準の各要件を満たしている優秀で安全度の高いロープであると誤認するのであることが予想されるのである。

また、ロープ以外の商品、たとえばピトン、ピッケル、アイゼン等に独占的に使用されると、すべてUIAAのきびしい安全基準を経た優秀で安全な商品であることを示唆することになり、「信用のシンボル」を悪用するものといわれてもしょうがない。

以上は考え過ぎかも知れない。しかし、これが現実のものにはならないと断言することはできない。

登山、特に人工的な登はんをする人達にとって、用具に対する信頼度は計り知れないものがある。一マークの悪用が、生命に係わる問題に発展しないとも限らない。

この問題は、今年の始めに、会員遠藤二郎氏によってもたらされた日本山岳会と日本山岳協会の理事会で議題にされた。また、本会海外連絡委員会では、UIAAと密接な連絡をとりつつ、どのように結着すべきか、何回も討議した。特に吉沢一郎氏により、間接的にはあるが、デューコ貿易株式会社へ働きかけがなされ、このマーク

の登録出願を自ら取り下げるようすすめているが、未だ何ら反応を得るに至っていない。

以上で報告を終るが、これは単なる一商標登録の問題であると片付けられない面もっている。UIAAが、機関誌に公示して、世界中の人たちの注意をうながすに値する社会性をもつ重要な問題である。山の世界へは入りこませたくない問題の一つではあるが。(六月二十九日記)

図 書 紹 介



霧の谷

増 永 迪 男 著

現在、日本アルプスなどの著名な山城では、登山道や道標が完備されてしまつて、よほどツムジ曲りなコースでも選ばぬ限り、地図磁石を片手にルートを模索するような山登りとは縁がなくなった。それでも各地に残されている二〇〇m以下の山々では、そういう

楽しみが必ずしもなくなつてはいない。本書に採り上げられた福井県の山二十四座は、ほとんどすべてが路のない山ばかりであり、高さは一五〇〇m前後の中級性の山でありながら、そういう路のない山を、積雪期、堅雪期に、あるいはまた沢を伝って登るたのしみをさりげない筆づかいで心にくいまでに表現している。

著者はかつてヒンズークシユのヤジュン峰へも出かけた一人だが故郷のこうした地味な山々へも、たゆみなく足をはこんで、「自己の内面の旅」としての山登りを続けていることは、多くの共感を覚える。近頃の好著と言えよう。

(B6判二〇〇ページ 一五〇〇円、昭和五十年五月二十日北陸通信社発行) (望月達夫)

南山の道

小滝清次郎著

南会津散策という標題のこの写真集の著者(会員二五六一番)は一九二七年会津坂下町の生れ、温厚誠実な山男である。私が、未知の著者から初めて手紙をもらったのは戦争直後のことで、南会津を中心とした山の会を作りたいという内容だった。そして何等手伝いをしない私に業を煮やした著者は青年の情熱をもって山のグループを結成した。

その後一九五八年「南会津山の

会」を創設し、爾来同会の中心人物として不可欠の存在である。本書のまえがきで著者は「昭和三十六年初夏、奥会津田島町に妻子と共に移り住むことになったのも、抑えきれぬ奥会津への愛着から」と記しているが、現在同地の山を

目指す人は社会人たると学生たるとを問わず、玄関町の田島町で著者の恩恵をこうむる場合が多い。その環境を愛する著者は山の写真は無論のこと、寸暇を見つけるとカメラを携えてバイクを走らせ

る。風景、民俗民芸、野仏、文化財など撮影した数は膨大なもので本書はその中から選りすぐっただけあって、傑作ばかりである。一口に傑作と言っても、著者のものは撮影が巧いばかりでなく、著者の人柄がカメラを透して被写体に語りかけているような温かな味を感じさせる。

言葉を変えれば、郷土愛がにじみ出ている。雪の深い道を行く人物、栃の実むきや吊し味噌作りや蕨肴づくりや木地を挽く人々。曲り家の春、駒止温泉、桧枝岐かぶき、分されの石仏、雪から首出した六地藏。どれを見ても、じつくり腰をおろした著者の凝視がそこにある。

このような作品は、われわれのように稀に都会から出かけて、駆け足で山を歩き麓を素通りする輩には、到底出来ないことである。そして、だからと言って地方に住

む誰もが出来るものでもない。その意味でも本書は高く評価されるべきであろう。

内容は大別して奥会津の人々十九葉、奥会津民家十七葉、奥会津山と河と十八葉、信と祭十六葉、南山の野仏三十八葉、文化財九葉他に奥会津の風土、石仏、味、歌舞伎に関して飯塚恒夫、大越大雄、酒井淳、室井康弘四氏の随筆が付いている。十二神将の弥勤、地藏、観音や庚申道祖神など野仏が多いのは著者の好みであり、除外した分を加えればこれだけで写真集が優に一冊出来る筈である。

書名「南山の道」の起因は、私は詳しく知らないが、往昔、南会津地帯が「南山お蔵入り」と呼ばれたことにあるらしい。謝安評。(A4判一四二ページ。布表紙函入。一九七五年一月、会津若松市歴史春秋発行。三四〇〇円) (川崎精雄)

会員通信

三水会について

山岳会会員の集い

今年の三月初旬、日本山岳会会員同志の親密感を深めた、むかしのような集りを持ちたいという話がでて、会合がもたれた。

まず楽しい集りをもつことが先決なので、楽しい会を作ろうではないかと、五月のある日、むかし

の親しい人たち一五名が集つてきた。楽しい会とはどんな集会なのか、今でも山岳会には集会係があり、担当者を中心に、非常に真面目にやっているようなので、その中に入つていったらいいのではないかと思うのだが……

しかし若い海外登山をめざす会員には参考になり、大学を出たての新人会員は楽しくついてゆけるが、われわれ中年層の者たちは勇気がないで、なかなか集会に入つてゆけない。

誰もが気楽に集れて、気の分った人たちが肩のこらない話し合いのできる場が欲しい。こんなのぞみかなえる集会が、山岳会にも必要ではないだろうか……

山岳会のルームは海外遠征隊の集りや、役員会のためにはもちろん使用され、会員のためにはもちろん使用されることが望ましいと思われ、前にあった三水会のように、気楽な会を再開しようではないかと、話がまとまった。

楽しい集会をやるには、まず第一に定期的であること、会員が案外気楽に集まってこられる日、この二つがないと永続きしないようだ。そこでとりあえず第三水曜日にしようということで、六月の第三水曜日から、まずはじめるように話しあった。

なおその第一回準備集会として七月十九日(水)夜、山梨県西原阿

寺沢の滝見荘で、有志懇談会を開催し、むかしのJACルーム(お茶の水体協内)時代の思い出話をしつて旧交をあたため、楽しい集りを持ってゆこうと話し合った。(中保)

第一八回有志閑談会

六月十四日(土) 新緑薫る後樂園涵徳亭で開催しました。

永年親しんでおりました六義園は、本年より人員、時間ともに規定が厳しく、使用不可能となり残念ながら会場変更となりました。麻生武治、織内信彦、島田翼、成瀬岩雄諸氏に珍しい山のお話をうかがえましたことを感謝致します。(小原晴子)

参会者

麻生武治、今村正二、今井喜美子、板倉勝正、折井健一、織内信彦、大野俊夫、川森左智子、金坂一郎、川崎精雄、近藤恒雄、桜井信雄、坂倉登喜子、佐藤久一朗、島田翼、瀬名貞利、成瀬岩雄、中屋健二、沼倉寛二郎、古沢繁、牧野 衛、松丸秀夫、村井米子、村尾金二、山崎安治、吉田久兵衛、渡辺公平、幹事 小原晴子、神崎忠夫、三枝礼子。

名誉会員 三枝守博氏

七月五日逝去。享年八十九歳。

明治十九年誕生。旧名威之介。東京高等商業（現一橋大学）に学び明治三十九年三月、日本山岳会入会、会員番号三五番。明治四十一年七月、白馬岳から唐松岳まで後立山山脈を縦走し、大黒鉱山に下って再び五龍岳に登り、カクネ里に下る。翌四十二年八月、再び五龍岳に登り、前年果たし得なかった鹿島槍ガ岳をきわめて冷沢に下る。さらに四十二年夏、辻本満丸、中村清太郎氏らと扇沢から爺ガ岳鹿島槍をきわめ引返して針ノ木峠までの諸峰を踏破して後立山山脈の縦走を完成する。なお蓮華岳へも登り、さらに中村氏と二人で平、ザラ峠、五色ガ原、薬師岳、黒部五郎、三俣蓮華を経て槍ガ岳から上高地へ下り、余勢をかって辻村伊助氏と霞沢岳へ登頂。三枝氏の名は後立山山脈の初縦走者として登山史に残されている。因に五龍岳という山名は初氏が初めて使われたものという。

この他にも明治四十二年七月、鳥水氏らの一行に加わり南アルプスの白峰、赤石岳の縦横断を行なった。

明治四十三年、幹事に選ばれて会務に参画し、昭和六年会則変更後は評議員に挙げられ、昭和十六年まで在位、昭和二十五年四月名誉会員に推挙された。

日本アルプス探検時代の最後の生存者であり、大先輩であった三枝氏の逝去に会は深甚なる哀悼の意を表する。

葬儀は七月九日、府中市白米台の自宅で挙行され本会から生花、弔辞を供えた。喪主守維氏も本会員である。

なお、故人の遺志により日本山岳会に寄付金が贈呈された。

元役員 中司文夫氏

七月八日細網腫腸により逝去。享年七十四歳。明治三十四年二月誕生。第四高等学校を経て東大文学部社会学科卒。昭和八年七月辻本満丸、岡田元両氏の紹介により日本山岳会入会、会員番号一四六番。昭和十一年十二月理事、昭和十六年二月常任評議員、昭和二十一年まで約十年間会務に尽くした。殊に昭和十二年六月下旬、横黒田両氏と共に上高地に至りウェストン師寿像の建設予定地を検分する等、同像建設に尽力し、また昭和十六年社団法人改組にさいしては、その手続きについて努力した。『山岳』28年3号に「毛猛連山行」の寄稿があるが、昭和八年七月の紀行で、この山城の登山記録としては恐らく初めてのものではある。

中司氏の逝去に対し本会は深甚なる哀悼の意を表する。

葬儀は七月十日江東区大島町の大島団地で行なわれ、本会から生花を供えた。

（以上・望月達夫）

ヒラリー基金への応募を

この十数年間ヒマラヤ・ソロクンブ地域におけるシェルパ族の医療、教育その他の社会事業に献身してこられたサー・エドモンド・ヒラリーは、去る三月末、カトマンズにて思いがけぬ飛行機事故のためルイス夫人と令嬢ベリンダさんを一瞬にして失ってしまいました。しかし氏はこの深い悲しみのなか、亡き夫人のためにこれらの事業を完成すべく前にもまして熱意をもっておられます。しかしクンデーの病院・八カ村の学校経営のほか、目下建設中の新たな病院の完成には多大の経済的負担があり、最近の手紙にも日本の友人達の薬品および金銭の応援は非常にうれしいことであるといっています。

このヒラリー氏の事業を支援する募金運動の趣旨をご理解の上、募金にお力添え下さいますようお願い申し上げます。

募金要領・

郵送の場合・宛先・〒214 川崎市多摩区生田九三九八番地、清野恒

銀行振込の場合・三菱銀行登戸支店「ヒラリーを励ます会」口座番号・二五八四二六三三七二

期間 五十年八月末日までとするが、状況によって延期。

ヒラリーを励ます会事務局V 折井健一、佐藤テル、清野恒

ポンゴス南峰

ごぶさたしています。

五月三日にリマを発ち、コルデイエラ・ブランカの登山基地ワラスに入り、PONGOS SUR（五六八メートル）に五月二十日、登頂しました。リオネル・テレイも登った山とかで、われわれは四登か五登らしいのですが、日本の隊はいままで登っていないはずですから、吉沢一郎さんにこのことを情報として伝えて下されば幸いです。概要は次の通りです。

メンバー

早坂敬二郎（東京農大山岳部OB）

柴田 直樹（神奈川大OB）

飯野 和男（〃）

五月十三日、ラグナー・ゲシュケ、五月十四日、ラグナー・パンパラホにBC、五月十八日、C1建設（ポンゴス南峰より派生する北尾根の末端）、五月二十四日、午前六時半、西側を流れる水河を一時、稜線上の最も大きな岩峰を右に一ピッチ半登り、それより北西尾根との交差する地点に出来ている氷のブロック帯の下までコンテニューアス（9・30AM）、さらに氷の弱いところにできているルンゼを直登、頂上台地に続く急斜面を経てポンゴス南峰頂上（12・40PM）、C1帰着5・00PM。

五月二十一日、C1→BC。

五月二十二日、アタック。

毎日定期的に雪が降ったりガスが出たりの天候でしたが、すばらしい山行を楽しみました。これから二週間ばかりの予定でアルパマヨのBCやワスカラン一周のトレッキング、その後ワイワッシュ山群のトレッキングに出かけます。それから先はエクアドルに入り、チンボラソを試みる予定です。なお、さきに北尾根といったのは、ペルー・ビアン・タイムス発行のANDINISMO Y GLACIO-LOGIA 誌10号の中のドイツ隊の記録に「北尾根より」とあるので、多分この尾根のことだと思われています。五月二十七日、ワラスにて。

（早坂敬二郎）

織内信彦宛

今年度の会費未納入の方は、至急納入ください。会費は次のとおりです。

* 東京都、神奈川、埼玉、千葉各県在住者 八五〇〇円。

* その他の国内在住者 六〇〇〇円。

* 国外在住者 25米ドル。

昭和五十年八月二十日発行

113 東京都文京区湯島一六六一 利根川商事株式会社ビル

発行所 法人 日本山岳会

発行者 今 西 錦 司

編集代表 大 森 久 雄

（813）二八六（代表）

振替口座東京四八二九番

東京都港区赤坂二丁目三番六号

印刷所 株式会社 技 報 堂

登山・スキー用具専門店

山の店

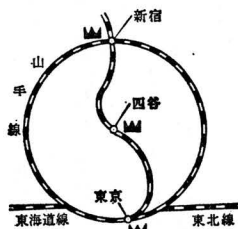
大阪市北区梅ヶ枝町101
TEL. 06(362)5736

- 買いやすい
山の店
- 北へ来たら
山の店
- フレッシュな
山の店

山とスキーの専門店

片桐

東京都文京区湯島3丁目38-9
片桐 盛之助
電話 東京(831) 1794・6680番



四谷店 東京都新宿区三栄町三番地
TEL (351) 7432-1912
八重洲口店 東京都中央区八重洲二の五
TEL (271) 1560-8575
新宿店 新宿ステーションビル四階
サービスショップ
TEL (352) 6564
日本信販加盟店



山友社 たかはこ



かるげシンティ
でんや 281-8456
中央区・八重洲4の1

香山荘

登山とスキー具

イワタ

東京都中央区日本橋通2-1
PHON: 271-7686・1718

登山用具の専門店

好日山荘

東京店・中央区銀座3-5-7 (561)3600・(567)9031
東京店・中央区銀座3-4-6 (561)0966 スキー店
大阪店・北区曽根崎上1丁目4.7 (364) 0933 (代)
福岡店・須崎町1-4 (28) 3440



茗溪堂＝山の本

東京都千代田区神田駿河台2の1・Tel(291) 9442振替東京24723

かんあおい

山下一夫著 <A 5判>定価2,600円

遙かなる未踏の尾根

マカルー1970年

日本山岳会東海支部

<B 5判430頁・カラー64頁>定価4,800円

シブトンの自叙伝 大賀二郎・

未踏の山河 倉知 敬訳

<A 5判440頁>定価1,900円

山に忘れたパイプ

藤島敏男著 <菊判584頁>定価2,500円

森林・草原・氷河

加藤泰安著<A 5判482頁>定価1,500円

山の古典と共に

大島堅造著<四六判280頁>定価1,500円

雪山・葎山 川崎精雄著

<A 5変型判340頁>定価1,200円

我がスキーシュプール

麻生武治著<B 6判388頁>定価3,400円

昭和50年版

山日記

日本山岳会編

<A 6ポケット判>定価950円

山岳

日本山岳会編

<A 5判>

総索引 1,000円

68年 3,000円

67年 2,500円

66年 2,300円

65年 2,000円

64年 2,000円

63年 2,200円

62年 2,000円

山で唄う歌1集・2集

戸野 昭・朝倉 宏編

<A 6判126頁>1集240円・2集280円

屋久島・美しい豊かな自然

赤星 昌編 <B 6判202頁>定価480円

日高山脈 北大山の会編

<菊判362頁>定価2,200円

吉沢一郎古稀記念論集

カラコラム

<B 5判200頁>定価3,400円

小さな頂

一原有徳著

<A 5判360頁>定価2,900円

原野から見た山

坂本直行文文集

<B 5箱入布特製本>定価4,200円

雪原の足あと

坂本直行著<B 5判206頁>定価2,800円

日本の山旅

足立源一郎スケッチ帖

<A 変型208頁>定価3,600円

いろいろばた 南会津山の会

<B 24どり判320頁>定価1,900円

すこし昔の話

初見一雄著<四六判400頁>定価1,200円

ブータン感傷旅行

小方全弘著 <菊判280頁>定価980円

登頂ゴジュンバ・カン

高橋 進編 <A 5判350頁>定価900円

会務報告

6月理事会

(6月6日午後6時)

本会ルーム)

●出席者 今西会長、織内、望月副会長、浜野、高遠、山本健、近藤、小倉、山本良、大森、大倉、田村俊、神崎、橋本、田村宏、浅田各理事、林監事、小原、浜野、折井各評議員(委任)皆川、原、黒石、浜口各理事、宮下評議員

●議事

・常任評議員が決定 (浜野)
小原勝郎、佐藤テル、浜野正男、折井健一、宮下秀樹各評議員が常任評議員となる。

・山研運営について

(小倉)
山研建設費がまだ不足であるので過去の基金状況と建設関係の収支をはっきりさせ、財務で検討の上、今後の方針案を出す。基金には協力されたい。

了承

・武蔵大学山岳部とトングリ山の会カラコルム合同遠征隊一九七六年都岳連へ推薦状交付の件 (浜野)

承認

・エベレスト日本女子登山隊帰国と歓迎パーティーの件 (高遠)

六月八日に一部帰国、六月一日に隊の大部分が帰国、六月二〇日に文部省、日本山岳会、読売新聞、日本テレビの後援四団体で歓迎祝賀会を開催、七月一日より開かれる「日本女子登山隊エベレスト初登頂展」に後援(名義使用)

承認

●委員会報告

各委員会メンバーが決定、行事予定については各委員会より詳細が別に発

表されるので省略

・総務(担当理事) 浜野吉生、高遠宏

・財務(委員長) 折井健一(委員) 高遠宏、宮下秀樹、中島寛(担当理事) 山本健一郎

・山岳編集(委員長) 山崎安治、金坂一郎、高遠宏、中島寛、山本良三、雁部員夫、節田重節(担当理事) 近藤信行

・会報編集(委員長) 山崎安治(委員) 片山全平、近藤信行、高遠宏

・小倉厚(担当理事) 大森久雄

・山日記編集(委員) 上原真一、井口邦利、池戸誠二郎、安藤利光(担当理事) 皆川完一

・山研(委員長) 折井健一(委員) 高山忠四朗、安彦六郎、小原晴子、高遠宏、羽賀育子、浜野吉生、田村宏明(担当理事) 小倉重子

・集会(委員長) 西奥亮平(委員) 河村憲二、小原俊、井口邦利、矢口陽一、伊丹紹泰、東原進、淵博美、辻和毅、福島健一、渡辺伝良、藪田晴重、川井ヨシノ、野口昌子、小林政志、岡沢修一(担当理事) 神崎忠男、浅田治男

・海外連絡(委員) 吉沢一郎、近藤等、牧野文子、鈴木郭之、関口周也、丹部節雄、秋田おみ、松沢憲夫、吉田隆三(担当理事) 田村俊介、田村宏明

・指導(委員長) 山崎安治(委員) 金坂一郎、川上隆、松永敏郎、宮下秀樹、中川武、宮崎敏一、橋村一豊、高橋聡、河野長、神崎忠男、橋本清、牧野内昭武、小川武、長堀憲司、浜口欣一、小西政継、三渡忠臣、広田靖典、藪田晴重(担当理事) 田村宏明、大倉昌身

・医療(委員長) 辰沼広吉(委員) 田村扇一、北博正、中島道郎、住吉仙也、広谷光一郎、大森薫雄、長

尾梯夫、原真、山本良三、岡部紀正、三方淳男、金子宏、川久保芳彦(担当理事) 浜口欣一

・自然保護(委員長) 渡辺公平(委員) 島田巽、大野俊夫、織内信彦、板倉勝正、村井米子、宇野佐、武田満子、豊島義明、木名瀬亘、内村鉄次郎(担当理事) 山本良三

・青年懇談会(委員長) 今村千秋(委員) 山崎安治、宮下秀樹、浜野吉生、高橋聡、神崎忠男、田村宏明、小川武、中山昇二、広島三朗、梶正彦、西村一夫、浅田治男、伊丹紹泰、黒川恵、北沢清行、聖生清重、桐生恒治、阿久津安兵衛、柳沢宏、岩本和夫(担当理事) 大倉昌身、橋本清

・婦人懇談会(顧問) 佐藤テル、村井米子、川森左智子(委員) 須田紀子(委員) 小倉重子、北島光子、山口節子、富田美知子、秋田おみ、関田美智子、梅野淑子、岸栄、宅間清子、奈須文枝、清水春美(担当理事) 黒石恒

・図書(委員長) 山崎安治(委員) 岩淵泰郎、横山厚夫、近藤信行、大橋晋、村石幸彦、油谷次康、高遠宏、宮下啓三、三辺夏雄、伊藤博夫、越田和男、野上成男、関田美智子、山下清、武田満子、福田宏年、河野悠二、鈴木実、泉久恵(担当理事) 山本良三

・書評(委員長) 島田巽(委員) 望月達夫、山崎安治、織内信彦、横山厚夫、近藤信行、山本良三、水野勉(担当理事) 大森久雄

・遭難対策(委員長) 金坂一郎(委員) 宮下秀樹(担当理事) 橋本清

・高所登山(委員長) 金坂一郎(委員) 今西壽雄、村木潤次郎、松田雄一、塚本圭一、住吉仙也、加藤幸彦、宮下秀樹、中島寛、浜野吉生、田村俊介、神崎忠男、高橋善数、池沼

慧、広島三朗、鹿野勝彦、小西政継、和田豊司、浅見正夫、池田常道、伊藤行人(担当理事) 原真

・学生部指導(委員) 宮下秀樹、浜野吉生、神崎忠男、伊丹紹泰、聖生清重、桐生恒治、村木富士、福島健一、藪田晴重、土屋康徳(担当理事) 浅田治男

50年度図書委員会行事予定

7月12、13日(土、日) 懇親会(上高地)
10月25日(土) 図書交換会
12月6日(土) この一本展(年次晩さん会場) 未定

2月20日(金) 山岳図書を語る夕べ(関根吉郎氏)
3月17日(水) 山岳史懇談会(甲南山岳部)

ルーム日誌

(50年6月)

2日(月) 集会委員会、婦人懇談会ヒマラヤ研究会
4日(水) 学生部、山研委員会
5日(木) ナンダ・デヴィ委員会
6日(金) 理事会
7日(土) 新旧役員交歓会、会報編集委員会

9日(月) 集会委員会、婦人懇談会ヒマラヤ研究会
10日(火) 山岳編集委員会
12日(木) ナンダ・デヴィ委員会
13日(金) 指導委員会
16日(月) 集会委員会
18日(水) 図書委員会、三水会、学生部

19日(木) ナンダ・デヴィ委員会
23日(月) 婦人懇談会ヒマラヤ研究会

集会委員会

24日(火) 大学指導者懇談会、山研委員会

25日(水) 海外連絡委員会、学生部

26日(木) ナンダ・デヴィ委員会、自然保護委員会

27日(金) 婦人懇談会

30日(月) 集会委員会、婦人懇談会ヒマラヤ研究会

6月中来室者五二七名

会員異動

退会者 四五八一 福田 耕平 50・3
七三三二 薪先 栄 50・6
五三三九 藤原 武夫 50・6

改名 七六六九 和田 民子(旧姓) 松本
四九三〇 山浦源太郎(旧姓) 栄

終身会員 一四九四 鈴木 正俊 昭和50・6
四〇四二 川喜田二郎 昭和50・6

支部変更 七二一九 石橋 善雄 その他
一九一四 大塚 武 北海道支部
五八二一 橋村 一豊 東京
五一〇四 宮沢 雄敏 越後支部
六六四三 川田 功 越後支部
四九七三 小方 全弘 静岡支部
五七一九 坂下 心一 静岡支部
七二五二 松井 宝一 東海支部

除籍取消者 四三三五 福原 健司
六五七六 渡辺 興亜
四九五三 藤森 元夫
一六五九 大阪大学山岳部

新刊図書受入報告(1975年2月)

1) Die Alpen club Zeitschrift des Schweizer Alpen-club 50 (4)	8) アラスカ植物紀行 '72	19) 岳 人 333
2) Die Alpenclub Manatsbulletin des Schweizer Alpenclub '74-12	9) ヨーロッパ・アルプス 1973年頃	20) 山と溪谷 438
3) Alpinismus '75-1	10) HKTニュース No. 16	21) 深田久弥 山の文学全集 4
4) Panorama der Slowakei '74-4	11) 兵庫山岳 93	
5) Verkehrsbuch No. 50	12) いこいの山岳会 163	
6) 第12回海外登山研究会報告書	13) 国立公園 303	
7) 第13回海外登山研究会報告書	14) 京都山岳 598	
	15) 自然保護 152	
	16) 登山月報 68	
	17) 山と雪 201	
	18) アルプ 204	